

# 旭川の生成と古代吉備平野

会員 矢吹壽年

## 1.はじめに

現在からは、考えられないような自然の営みがあって、その後の自然の営み、人類が岡山の地にやって来て、その足跡が確認できるのです。素晴らしいと思いませんか。私は1940年の生まれで、今年74歳となります。生まれは戦前派ですが、育ったのは戦中派、小学校に行く時は戦後派の筆頭でした。

第二次世界大戦の、前とあとでは歴史の把握、感覚が異なります。米国を主とする、国際連合軍の日本民族の報復を恐れる気持ちが、一番の原因だろうと思いますが、これは現在も存在するようで、日本の敗戦後、何年になりますか、米国のアジア戦略の好適地として沖縄の基地提供が続いています。

政府は米国と親密に交際できることで、政権維持を図っていますが、所詮、米国人とは一戦ある事は避けられないことを認識しておかねばならないと思っているものの一人です。



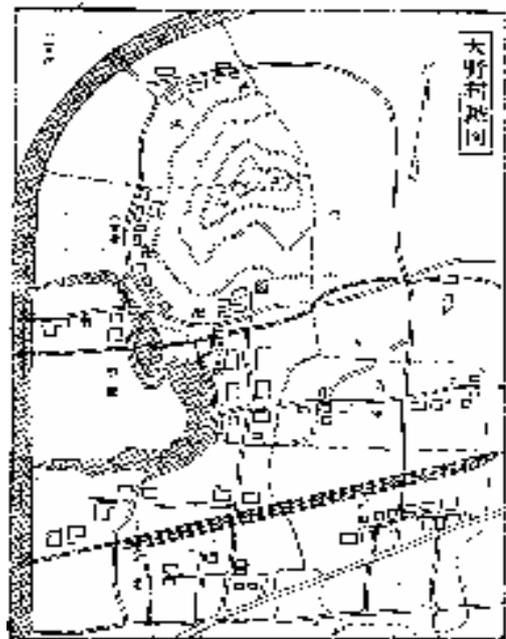
牧石宗谷山から南 旭川下流を望む(筆者提供)

ところで、この旭川が仕出かした、岡山の平野化と河淵の抉(えぐ)りは、その後の備前平野の歴史と関係があるのです。冒頭に、歴史観の変更、交替があったことをお話しましたが、それまでの歴史を教育する根本に、以前と変更があったようです。戦前の軍国教育、皇室敬体の教育は改められ、民主という名の無圧、自由主義が蔓延したように思いま

す。

そんな中で、小学校の学区外で夏期の郷土歴史講座が開かれ、資料の内容は戦前の御津郡地図の裏に書かれた、戦前から知られた遺跡の案内でしたが、古墳の案内や、説明が少し変わっていたように思います。前方後円型古墳が意識され、この形の古代の墓は日本に限られ、その古墳が吉備中山の茶臼山と呼ばれた御陵であり、尾上のギリギリ山と呼ばれた車山古墳、松尾の旧馬屋小学校の裏山の飯盛山古墳であったと思います。

この時スタッフの中に居られた佐藤勲先生が、その後中山中学校に赴任せられて、授業は英語の文法であったように思います。当時は前方後円墳といわれていた幸川市場の中学校敷地の校舎裏の丘を発掘したことがあります。前方部に当たる辺りの現在、東側からの石段を上った辺りに、円筒埴輪を掘り出して、前方後円墳であったと話されました。



市編入当時の大野村見取図(大野村誌より)

その佐藤先生とは、地元のボーイスカウト団の指導者でもあり、後に町教育委の職員となった私とも関係ができたのです。その佐藤先生が退職後、「目で見える。あけゆく郷土」(岡山市御南地区)という郷土誌を昭和63年に

書かれました。知人を介して購入し、その後何度か先生の記録から読み出したことを、私の講座で披露しましたが、その内、少し考えを改めなければならないことに気が付きました。

大野村誌に巨大な河口湖というか、池があって、これが古代の笹ヶ瀬川で、野殿地区は津高郡に属していましたが、明治22年の町村制施行に際し、合併、大野村と名称を整えて発村します。

## 2. 蒜山三座の噴出

蒜山原（ひるぜんばら）は、小学校高学年になると何度か訪れました。観光バスガイドが、そのたびに蒜山湖と云う巨大な湖であったと話していました。蒜山三座は形良い山だと子供心に思ったものです。しかし蒜山湖が流れ出して、岡山平野を造成するなんて、思わなかったし説明も記憶していません。

岡山と鳥取の分水嶺の北側に、今から約100万年前、蒜山三座が現れました。以前は白山火山帯と名付けられていた火山が爆発、三座を形成して60万年前頃鎮まった。分水嶺と蒜山三座の間に出来た沢の水は西に流れ、やがて日本海へと流れ出していました。



蒜山三座と古蒜山湖(真庭観光連盟提供)

## 3. 大山火山の噴出

大山の最高峰は1729mの剣ヶ峰で、約30万年前頃に噴出し中国地方最高峰となる。中国地方に住む人々の死後の魂が上る山と云う伝説は、仏教伝来後の大山寺に起こった地藏信仰にも、原因は求められるだろうが、古

代からここを訪れた人たちの共通感覚ではなかったろうかとおもいます。形の良い富士山型を称して伯耆富士とも云い、古代以来日本海航路の目当て山となっています。

大山は、180万年から50万年前に噴火形成された成層火山の古期、大山のカルデラ上に巨大な溶岩ドームを形成します。以後も数回にわたり潰滅な大噴火を起こしており、中でも5万年前の噴火は大規模な軽石、火砕流を噴出します。2万年前にも噴火し現在の彌山、三鉢峰、烏ヶ山の溶岩ドームを形成し、最後の噴火は1万年前であって、以後の噴火は記録されていない。この30万年前の噴火で、西流する水路を溶岩流や火砕流で遮断したため巨大な古蒜山湖となる。東西約20kmに及ぶ広大な湖が形成された。

ここに四季の雨雪が止められ、火山性の噴出物や硫黄等、肥料分を溶解し、高栄養化の湖水に藻類が大量に繁殖し、100mを超える珪藻土層（珪藻が堆積、化石となったもの）を形成する。やがて湛水と蒸発を繰り返していた蒜山湖も満水となる。あふれた水の行き先は南の岡山側へと流れ出す。台風の集中豪雨か、雪解けのころか、或いは大山の火山活動による地震か。現在では予想もできない。或いは、少量ずつ流れ出して河道を付けたかもしれない。しかしこれが、確実に旭川の水源としてのイニシアチブを取っていたのである。



約2000年前の御南4ヶ村想像図 佐藤勲氏作図

あけゆく郷土(御南地区)掲載

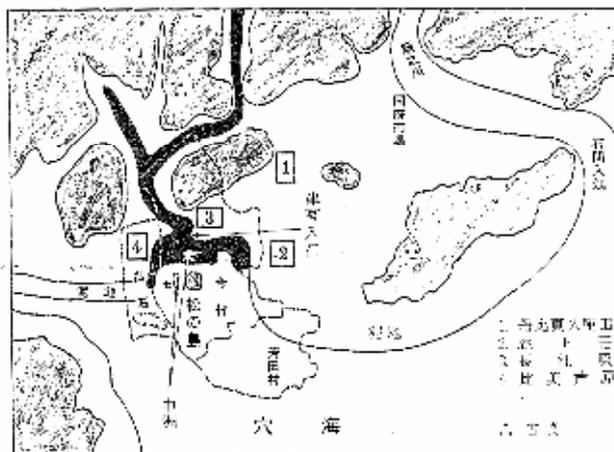
こうして旭川は河川底部の土、岩、草木も根こそぎ、音を立てて怒涛のように流れくだり、川幅を広げ川底を掘り下げながら、或いは滞留して、峠の低いところは乗り越えて流し、巨岩に当たった所では深い淵を掘り下げて流れ下り、現在の岡山平野に近い風景としたのです。

こう考えれば、三野の水源地の現在の地表から約 4m 下に弥生時代の住居跡が確認され、鹿田の岡大付属病院敷地の 1m 下から弥生時代の住居址、水田跡が確認されている。水田には天水池と見られる皿状の窪みが確認されました。水稲を作ろうと苦勞したあとも知れませんが、山間から開放された水は谷口を掘り下げ、川下の流下速度が落ちたところで、砂泥や小石を沈殿させるので跡は高くなります。

大供の石門別神社の境内には角（かど）の取れた石が転んでいる。名前に因んだ石を寄せたとも考えられるが、水流の関係でここだけは、多くの石が残ったのだろう。

鹿田地区は、吉備の大島、鹿田（かた）の大島とも呼ばれ、平安時代藤原氏の「殿下渡領」と呼ばれた藤原氏の渡り領であったと伝えるが、池田忠雄の頃、西川用水路の開削によるまで、良い水田ではなかったことを指摘しておきたい。用水の上がらない陸田で陸稲（おかぼ）しか作れなかったのである。岡山理科大学の進入路敷きにある「朝寝ヶ鼻」貝塚から出土した陸稲の作られた陸田は実に湖の鹿田であったかも知れない。

ところで岡山市内の旭川は宇喜多秀家による新城築き上げ以前は、祇園辺りから東南へ蛇行し大多羅辺から、児島湾内に流出し、本流となっていた。県立図書館辺りから、船頭町、浜野辺りが旭川の川津となっていて、法



約 1200 年前の御南 4ヶ村 作図 佐藤勲

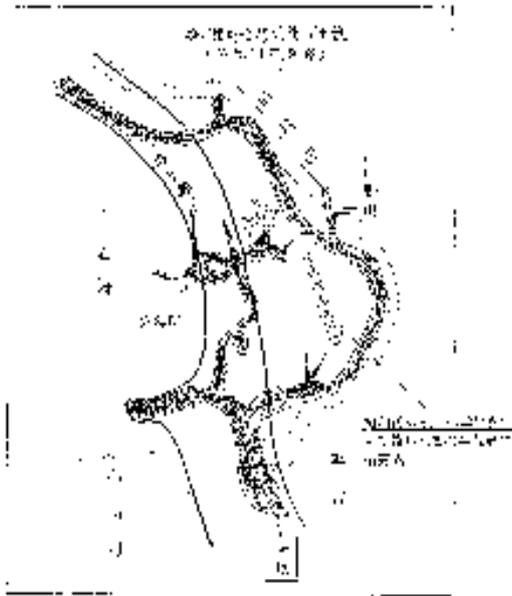
華宗の西国弘通に際し、豊前地区を訪れた大覚大僧正・妙実の来由を船路としているのを見れば、細い流れも存在していたようだ。大野村誌に示された巨大な河口湖は笹ヶ瀬川であるが、笹ヶ瀬川はこのような流量は示さないで、蒜山湖の水があふれて笹ヶ瀬川と合流して吉備中山に打ち当たり、一宮・平津沖の平野を造成した時、深い淵を残したものであろう。余勢をかって吉備の中山の北麓を巡り、川入・撫川から児島湾にも流出していたと指摘したい。この地域は十二ヶ郷用水の管轄区域で、高梁川の旧流域と考えられるが、川入の辺りに転ぶ岩礫に水成岩は多くない。

一時のみ蒜山湖の水流を流した跡が溝状地となって残っていたのを、後に排水溝として使用したものへ、泥や砂を掻き揚げて他の水田と高さを均して。撫でるようにしてできた新田と云う意味を持たせたのが撫川であろう。川は無くなって美田となったのである。

私の実家は北区の一宮山崎であるが、実家の井戸を新掘した時に 7~8m 下の地中から、海岸等で見かける芥状のごみが炭化して出土したと伝える。私の邸は今岡にあるが、水道管敷設の時、隣地を掘削したとき、これも 7m 位掘った時、同様の炭化物の出土があった。

#### 4. 蒜山湖の土手の決壊はいつごろか

では、旭川が蒜山湖の湖水を流して蒜山原になったのは何年ごろか。岡山理科大学の鎌木



笹ヶ瀬川改修前後の比較 昭和 13 年改修

先生が蒜山原で縄文土器を採集されてから、理科大学では旧石器時代の遺跡から石器を発掘している。

その成果（竜頭遺跡）からみると、発掘土壌層からみて、2万2000年～2万年と結論している。湛水がなくなって、どのくらいで古代人が追跡する大型動物が棲めるものかは、食糧となる草や木が成長するものか、について異論はあろうが、とにかく3万年以前くらいに蒜山の湖水が流下し岡山平野が出現して、その時の泥が、現在の四国まで届いていて、縄文人は四国まで歩いて行くことが可能だったという。それならば高梁川は西流して豊後水道に流れ、吉井川や旭川は、東流して紀伊水道に流れていたことになる。

倉敷市児島沖の堅場島の浜には多数のサヌカイトの原石、加工途上品や未完成品の石器が残る。原石地（今の香川県）にいちばん近い加工工場であったかもしれない。

私が残念に思うのは、佐藤勲先生の『目でみる。あけゆく郷土』に記録してある遺跡や、遺物を現在の研究者達が把握していないことである。御南中学校の運動場から縄文人の屈

葬墓が見つかったことなどを、岡山市の遺跡地図にも記載がない。（現県立西養護学校敷地＝岡山市南区田中地先）。

縄文人が築墓した標高は大切である。東日本震災に伴う津波の被害も縄文遺跡には、ほとんど及んでいないというのではないか。

## 先史時代の衣類を考証

### 衣服の起源はどこにあるのか？

会員 濱手英之

先史古代の時代はわからないことだらけだ。衣服一つとってもそうである。我々は、太古の人たちの服装をほぼ裸であるか、もしくは毛皮などを着ていたのではないかと考えている。しかし、実際は相当古くから凝った衣服を身につけていたことがわかってきている。

以下にナショナルジオグラフィックから抜粋する。

衣類の起源はどこにあるのか？この問いは、単純であるがゆえにかなりの難問だ。映画や漫画などに登場する原始人は獣の毛皮を身にまとっている場合が多いが、実際はよくわかっていない。衣服を身に付ける行為は人類だけの特徴だが、その習慣が発達した経緯を解明しようという試みはまだ始まったばかりだ。

衣服が化石として残るケースはほとんどなく、骨を取り巻く軟組織と同様あっという間に朽ち果ててしまう。だが研究者たちは、染色された植物繊維や衣服に寄生していたシラミなど間接的な証拠物を手掛かりに、先史人類の服装を断片的にはあるが明らかにしつつある。

古代の服飾類で特に古い遺物には、アメリカのオレゴン州で出土した樹皮の繊維を素材とす

る約 8000 年前のサンダルや、エジプトの約 5000 年前のシャツやビーズ付きドレスがある。また、アルプス山中で発見された約 5300 年前のミイラ、アイスマン（エッツィ）が身に付けていた獣皮と干草の編み靴、毛皮の上着、皮製のゲートルや下着などが知られている。だがフランス、ボルドー大学の考古学者レベッカ・ラグ・サイクス（Rebecca Wragg Sykes）氏によれば、さらに古い年代の遺物が必要で、この程度では不十分なのだという。

例えば、ロシアで発見された約 2 万 8000 年前の墓をはじめ、先史時代の墓からは、衣服の装飾用と見られるビーズや歯など、当時の服飾を伺わせる遺物がわずかながら見ついている。

しかし、これらはみな被埋葬者用の衣服だ。先史時代の人々が日常生活の中でどのような衣服を身に付けていたのか、まだ明確な結論は出ていない。一方、数万年前の人類が衣服を仕立てていた間接的な証拠はいくつも存在する、とサイクス氏は話す。



縄文人の衣類(より)

アメリカ、ジョージア州の洞窟群からは、約 3 万年前の植物繊維が見ついている。ピンクや黒、青に染められており、当時の布地作りに関する手掛かりになるだろう。また、約 2 万年前の骨針も発見されているが、おそらく衣服や装飾品の縫製に使われたのだろう。

先史時代の人々を描いた想像図などでは、粗雑な毛皮を身にまとう姿が大半だ。だが考古学的資料から判断すると、2 万 5000 年前には、

既に複雑な衣服が作られていたとサイクス氏は指摘する。

ところで、先史時代の人類はわれわれホモ・サピエンスだけではない。近縁種とされるネアンデルタール人も間違いなく衣服を着ていたと考えられており、興味深い研究が行われている。

2012 年、アメリカのコネティカット大学で人類学を専攻する大学院生ネイサン・ウェールズ（Nathan Wales）氏は、ネアンデルタール人が着用していた衣服について詳しい分析を試みた。

ウェールズ氏はまず有史以降、狩猟採集生活を営んでいた 245 の文化圏に見られる服装の特徴と、それぞれの生活環境条件を調査。氷河期の間、特に寒冷な地域で暮らすネアンデルタール人は体表の 80%以上を衣服で覆う一方、気候にふさわしいものではなかったという仮説を立てた。

ネアンデルタール人に比べて、現生人類は寒さに対する耐性が低い。そのため、防寒効果のある衣服を仕立て、それに身を包んで冬の寒さをしのいだと推測したのだ。

その後われわれ現生人類は生き残り、ネアンデルタール人は絶滅する（身体的、文化的な観点から見た場合、ネアンデルタール人の遺伝子は現生人類に受け継がれている）。原因はまだまだ不明だが、ウェールズ氏は両者の服装文化の違いが何らかの影響を与えているのではないかと考えている。

原生人類にネアンデルタール人の遺伝子が混血していることが分かったのもつい最近である。解析技術の進歩で長年の謎がとかれることは、何とも好奇心がそそる。

そして、身近にも、倭文織、どんざ、等、消えてしまった衣料、技術は多い。新しいものの中には、なかなか新しいものはないと感じる。古いものにこそ新しいものがあると信じる。先史古代への興味はいつまでも尽きない。

以上、主にナショナルジオグラフィックニュースより参考になりました。

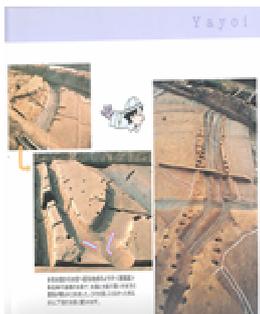
## 考古ファンの「じゃれごと」⑧

### 縄文人と弥生人の関りを

#### 記紀に見る(猿田彦のこと)

私は予(かね)てから、約2500年の昔に中国の江南(呉の時代)地方から水耕稲作の技術を携えて日本列島に渡来し、先住民である縄文人と「和合」し新しく、弥生人の社会ができて今日があると信じて来た。残念ながら素人の浅ましきで、それを立証することが出来ないでいた。そんな矢先に歴史研究会が発行している「歴史研究」なる冊子が届いた。その中に三重県鈴鹿の会員で小林伊佐夫氏の論文「私説 猿田彦の正体」が目にとまり合点した次第である。

記紀による神話の世界に出てくる、猿田彦のことは一般に良く知られている。道先案内の神として身近な存在である。高天ノ原から葦原の瑞穂の国(当時の日本列島)に、ニニギノミコトら一行が降臨した時に、地元の国神(くにつかみ)の猿田彦が案内した件(くだり)の説話である。当時(縄文晩期)の日本列島には、豊かな森に木が茂り、清らかな水が小川に流れ、果樹の実も豊富で、川の浅瀬では魚も捕れたし葦原が広がって、先住民(縄文人)が住んでいた。そんな光景が臉に浮かぶ。そこに天神(あまつかみ)が渡来して来て日本国を統治することになる。



「百間川の遺跡探検」より 水田の様子

#### 岡山県古代吉備文化財センターのパンフより

先住民も穀物の中でも稲=米の美味しさを知っていて、陸稲を栽培し焼畑を続けながら移動していた。稲の欠点である連作障害を乗り越えるためには、焼畑で移動しながらの耕作であった。そこに水耕稲作技術を持った渡来人は、故郷の中国江南地方に比べ、より管理のしやすい豊富な小川が随所にある日本列島に定住して稲作を始めた。質・量とも先住民の陸稲とは比較にならない。遠くで見ていた縄文人は、戦って排斥するのではなく「和合」の道を選び、お互いの長所・技術・経験を生かした「共生」が始まった。と私は推論している。

和合の証拠が古事記に猿田彦として登場していたのだ。縄文人の末裔であるアイヌの人々が使っていることばを研究し精査された、小林伊佐夫氏は概ね次のように説明されている。

**「猿田彦の猿(サル)はアイヌ語で葦原を意味し、田(タ)はある(有る・在る)を意味する。彦はオトコ(男)の意味で、芦原に住む人達」**

との明快な解説である。さすれば国神が天神を案内したとする古事記の編纂者は、当時から約1000年も昔のことを、猿田彦との逸話として我々に残してくれたことになる。

全国歴史研究会の仲間の研究成果で、私の推論がまた一つ確証された。新しい学びを得た「歴史研究」の冊子であった。

2013. 25. 2. 28



弥生末期 岡山の百間川遺跡では田植えをし  
弥生人の足跡も残っていた 山崎撮影

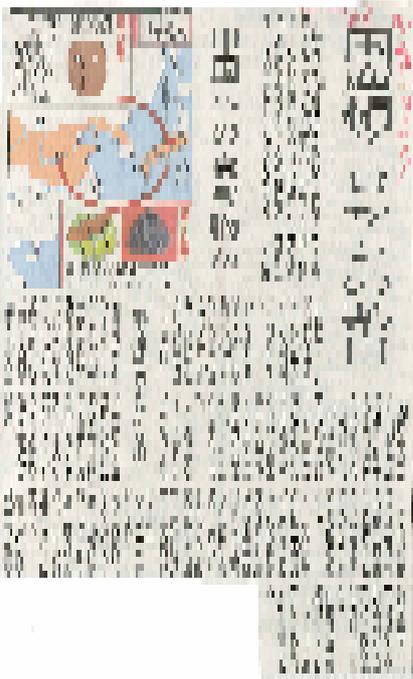
## 考古ファンの「じゃれごと」⑨

### 私の仮説を専門家が立証

#### 『国産絹？ロマンの糸口』

#### (1) 纏向遺跡(3世紀後半)で出土分析結果

表題の件は考古ファンの「じゃれごと」シリーズで発表していて、そのNO⑤を2012.1.21に起稿し2月29日発行の“きび考”5号に掲載し発表した。タイトルは「古代社会の産業革命と異文化の融和」と題し、主に水耕稲作技術とそれを受け入れた先住民（縄文人）の関係を論じている。



2013.25.5.31 朝日掲載記事

私はその中で、魏志倭人伝の絹は「山繭」と仮説を立てています。当時は学術的に国産の繭が定着していない状況で、倭人伝に記載されている『絳青縑（こうせいけん）＝赤と青の絹』の定説がなかったのですが私は次のように表現しています。

『魏志倭人伝にも絹のことが出ています。生糸(養蚕)は5世紀に伝わったとされていますから弥生時代は絹の生産はありません。しかし栽培種の粟に巻きつく山繭の存在を彼等が見落す訳がありません。中国地方の山塊を散策していると、今でも山繭を見かけます。金糸は貴重でした卑弥呼が中国の魏王に献上したのは黄金に輝く金糸であったと想像しています。漆の採取も知っていたことでしょう。吉備の山間地には漆の木が多く自生しています。漆技術は中国より日本列島の方が1000年も早く縄文中期の遺物が出ています。

繊維質の多い麻や三椏(みつまた)・コウゾは今では和紙の材料ですが当時は、水にさらし柔らかくして布にしました。木綿(ゆう)と書きますが綿から採った糸で編んだ今日の木綿(もめん)ではありません。着物は当時機織が有りませんから当然女性らによる手織りでした。枝に縦糸をつなぎ睡でシャトルのように行き来して編み上げて行ったのです。今でも布の幅は女性の肩幅(3~40cm)と決まっています。女性は貫頭衣として、男性は横幅布衣として着用しました。獣の皮も重要な衣類でした。』



今回上記朝日新聞の紹介で奈良女子大の中沢隆教授が、纏向遺跡から1991年に出土した遺物の分析で「天蚕＝てんさん」であることを証明され。それを染色して「絳＝赤いろ」が出せる技術もベニバナの花粉の確認で証明された。

この記事に接して素人の考古ファンが立てた仮説が、こんなに早く学者によって証明されたことが嬉しく、考古ファン冥利についた思いであった。

## (2)中国地方山地での山繭採取

私は戦後、母方の親戚が製糸工場を経営し繭から絹糸を作っていた。湯気が噓(む)せ返る工場の中で、年配の大勢のおばさん達が指サックをして絹糸を撚り出している光景の中で育った。一種いやな蛹(さなぎ)の匂いが鼻を衝(つ)いた。

中国地方の山麓では山繭(カイコの繭と同じ形で色が薄茶)がクヌギの枝にぶら下がっているのが目に付いた。それを集めて、叔父さんのところへ、持っていけば、子供の小遣いには余るほどであった。大人も専門に集めているようであって、製糸すれば茶色であり金色に輝いた。一般のカイコの白い繭より高価なものようであった。私の幼少の頃の体験から古代に興味を持つようになって卑弥呼の魏への土産と重ねた。

## (3)倭人伝の魏への贈り物は天蚕と漆

桑の木の葉からカイコ(家蚕=かさん)は古代中国とギリシャを結ぶシルクロードで有名ですが、完全に家畜化された白い繭で今日まで綿々(めんめん)と繋がっています。

私の認識ではカイコや桑は半島から秦氏の技術集団が日本列島に持ち込んだと考えますが、繭を製糸にする技術が先行し桑と家蚕は後のことと思います。繭は山繭=天蚕でした。古代人も衣食住は、身近な山野の自然から採取し活用しました。麻や葛(くず)の自生している植物からの織物と、山繭や小動物の皮を加工する技術は持っていました。

特に漆の技術は日本の方が大陸より古いとの説が定着しています。日本の先住民=縄文人とその後の弥生人は海峡を挟んで大陸や半島との交流が活発で、金属加工(主に鉄や青銅器)稲作と関連技術を共有していました。海人族=倭族の活躍です。

卑弥呼はその中から、当時も今もそうですが貴重な天蚕の黄金の絹と中国地方特産の今の備中漆を持参し魏の皇帝に贈りました。魏志倭人伝では絳青縑(こうせいけん)として当時の中国の言葉で伝えているのです。

## (4)養蚕の思い出

私は戦後に山陰に育ったので、まだ養蚕が農家の一番の副業でした。母屋に続いて「養蚕場」があり、牛や馬は母屋の内庭で飼っていて家族同様に可愛がっていました。まさに家族の一員でした。蚕も家畜として飼われた最初で最後の昆虫です。小さい卵から孵った1齢から10時間程度の眠りを重ね5齢で蛹(さなぎ)繭を作りその中で蛹化(ようか)し完成する。



自然のおはなし カイコ 山陽 25.7.24

小さい時の蚕は柔らかい桑の葉を与えていて、成長につれて食欲も多くなり竹の養蚕棚いっぱいの桑の葉に音を立てながら食べていた。温度管理も大変らしく、室内は密閉され大人の真剣な様子が子供たちにも伝わってきた。食欲も旺盛になると、糞も多くその独特な臭いも忘れられない。

桑の葉もお仕舞いの頃には枝ごと採取してきて指先につけた刃物で素早く枝から葉を収穫していた。枝の片付け等が子供の役で外庭に山積みしておき、五右衛門釜のお湯の焚き火材として重宝していた。

その葉を採った残りの枝＝桑にとっては徒長枝は、確か皮を剥いで、和紙の材料に使ったと思うが子供で詳しくは覚えていない。桑と同種の一年草が麻で、麻の木の皮から麻布を紡いだ。

我々が中学生になる頃は、あれだけ大切にしていた養蚕用の竹棚も、風呂の炊き材に消えていった。若者は「金の卵」として都会に駆り出された。

桑の木には実が付き、赤実が熟すると黒くなり、子供の格好のオヤツであった。学校の帰り道、他家の桑畑で採取して食べると口元が黒くなっていて、一見して悪さがばれたが誰も咎める大人はいなかった。昭和 30 年代初めまでの集落の様子で、懐かしい。

実は桑の実は、今住んでいる岡山市中区のふれあいセンターの中庭に植えてある。当地が桑野の地名に由来して、気の利いた職員が植栽したのだろう。グランドゴルフの仲間と遊戯中に、自然と手が出て桑の実を食していると、私より年配の仲間が珍しそうに見ている。干拓地で育った彼らには養蚕の経験が無く、桑畑は存在しない、よって桑の実も知らないで育ったのだ。

懐かしいことは他にもある。蛹（さなぎ）は私たちの当時は一般に鶏や鯉の餌だったが戦時中は人間の食材だったと親から聞いた。稲穂が実る頃は蝗（イナゴ）が大量にいて、自宅に持ち帰って煎って食べた。今でもイナゴの佃煮が美食家に愛されているが、当時は子供のオヤツであった。

余談だが地球の人口が増えると究極の食材の一つに昆虫があるとの学説を耳にした。蛹（さなぎ）が絹の材料でなく、食材の時代になるかもしれない。

## (5)まとめ

今では皇居で田植えと養蚕が皇室の伝統行事として伝えられ、一般の養蚕はGM（遺伝子組み換え）カイコに替わりつつあることが、朝日新聞の平成 23 年 11 月 28 日の特集記事に掲載されていた。



朝日新聞の平成 23 年 11 月 28 日の特集記事

西暦 243 年に邪馬台国の卑弥呼が魏王に贈った絳青縑（こうせいけん）と称する絹が天蚕（山繭）であったとする私の仮説が今年の 5 月 31 日に学者によって証明された、意義は私にとって大きな出来事であった。話は横道にそれたが、それも一興として懐かしく思い出した。

2013. 25. 8. 2

# 氣比神宮末社 擬領神社と 黄蕨(吉備)国

会員 丸谷憲二

## 1 はじめに

吉備国の語源「黄蕨」を調査していて、黄蕨(吉備)国と越前国が強く結びついている事実を発見した。氣比神宮(福井県敦賀市曙町)末社擬領(おおみやつこ)神社と化氣神社(岡山県加賀郡吉備中央町案田)である。祭神より黄蕨(吉備)国との関係を考察したい。

## 2 氣比神宮の祭神と末社 擬領神社

越前国一宮・北陸道総鎮守、氣比神宮の祭神は、伊奢沙別命(いざさわけのみこと)を主祭神として7柱を祀る。仲哀天皇(ちゅうあい)・神功皇后(じんぐう)・応神天皇(おうじん)・日本武尊(やまとたけるのみこと)・玉姫命(たまひめのみこと)・武内宿禰命(たけのうちのすくねのみこと)である。

末社に擬領神社がある。擬領神社の祭神は武功狭日命(たけいさひのみこと)である。武功狭日命は吉備臣祖稚武彦命の孫である。稚武彦命(わかたけひのみこと)で吉備国と直結する。



擬領神社



氣比神宮

### 2.1 擬領神社の擬領(おおみやつこ)とは

氣比神宮のHPの説明が下記であるが、擬領(おおみやつこ)の意味が不明である。擬領は「おおみやつこ」とは読めない。

**擬領神社[おおみやつこ]**

社記に武功狭日命(たけいさひのみこと)と伝え、一説に大美屋都古神(おおみやつこのかみ)又は玉佐々良彦命(たまささらひのみこと)とも云う。

『奮事紀』には「蓋し當國國造の祖なるべし」と載せてある。

「おおみやつこ」とは、「大領」のことである。

『日本国語大辞典第二版第2巻』

おおみやつこ[大領][名]律令制の郡司(ぐんじ)の長官。少領、主政、主帳を指揮する。大郡、上郡、中郡に設置。

『日本国語大辞典第二版第8巻』

たいりょう[大領][名]('だいらょう)とも。令制で郡司の長官。在地の有力豪族を任用する。おおきみやつこ、こおりのみやつこ。郡司。

「大領」とは、郡司(ぐんじ、こおりのつかさ)のことである。

『日本国語大辞典第二版第4巻』

ぐんじ[郡司][名]('ぐんし)とも。令制下の地方官。国司の下で一郡を統治した。大化改新(645年)に始原があるが、大宝令以後は大領・少領・主政・主帳の四等官で構成される。郡司は以前の国造の系譜を引く現地の豪族が優先的に補任され、終身官で代々世襲された。これは律令制の他の官職に比べ、極めて顕著な特徴である。郡職。



角鹿神社

『国史大辞典4』

ぐんじ[郡司]律令時代に国の下級地方行政組織であった郡の官人の総称。大領・少領・主政・主帳の四等官より成るが、狭義には大領・少領のみを指し、これを郡領ともいった。令制は郡を五等級に分けて定員を定めているが、郡の規模の縮小、軍事的機能の軍団への移譲などにより、郡司の権限は大きく削除された。また

正員のほか員外郡司、権任郡司、擬郡司などがあり、「擬大領」は正式な役職名である。擬領とは「擬大領」のことである。

擬領の正確な表記は、擬大領である。擬郡司が擬大領である。擬大領の名前は、『古事類苑 官位部二』に多く収録されている。「郡司擬大領外正七位下忍海連法麿」「擬大領正七位下難破忌寸」「対馬嶋下縣郡擬大領外少初位下直氏成」「擬大領正七位上依知秦成益」「副擬大領外正七位下依知秦公名手」等々。

甲斐国一宮浅間神社では「八代郡擬大領、社家の祖」と正確に伝承されている。

### 甲斐国一宮 浅間神社 境内末社「真貞社」八代郡擬大領

真貞社とは甲斐国一宮 浅間(あさま)神社(山梨県笛吹市 一宮町一ノ宮 1684)の境内末社である。祭神は伴直真貞公である。伴直真貞公とは、貞観 6 年(864 年)富士山噴火時の八代郡擬大領であり、社家の祖である



擬領(おおみやつこ)神社とは『擬大領神社』であり、祭神は武功狭日命である。社家の祖である。『先代旧事本紀大成経 国造本紀』に「角鹿國造」と記録されている。』

#### 『先代旧事本紀大成経』国造本紀

「角鹿(つめが)国造  
高穴穗宮朝、御代黄蕨臣祖若武彦命孫建功狭日命、  
任定二賜国造一」

## 2.2 稚武彦命

稚武彦命は孝霊天皇(こうれい)の皇子で、

子に吉備武彦命(きびのたけひこ)がいる。記紀に下記の記録がある。

#### 『古事記』孝霊天皇段

「大吉備津彦命と若武吉備津日子命(わかひこたけきび あひたぐ はりま ひかは さき つひこのみこと)とは、二柱相 副ひて、針間の氷河の前 いはひべ す に忌 盃を居えて、針間を道の口として、吉備国を言向け ことむ やは 和したまひき。」故、此の大吉備津彦命は、吉備の上つ道臣の祖なり。次に若武吉備津日子命は、吉備の下つ道臣の祖。

彦五十狭芹彦命(ひこいさせりひこのみこと)。亦の名は吉備津彦命。…亦妃緇某弟(またのみめはへいろど)、稚武彦命を生む。「弟(いろど)稚武彦命は、是吉備臣(きびのおみ)の始祖(はじめのおや)なり。」

## 3 化氣神社

吉備国に化氣神社がある。「氣比神宮」の「氣比(けひ)⇒化氣(けぎ)」、「比⇒化」、「角鹿(つめが)⇒鹿角」と変化している。化氣神社は備前国津高郡上田村案田(岡山県加賀郡吉備中央町案田)化氣山に鎮座している。創建は養老年中(717~723)である。祭神は大和漆上郡春日大明神4柱「武甕槌神、齋主神、天兒屋根神、比賣大神」と伊奢沙和氣神の5柱である。第十代崇神天皇の十年孝霊天皇の皇子大吉備津彦命四道將軍の一員として吉備国に派遣。異母弟若日子武命と共に針間(播磨)国から本宮山の峯に来られた。化氣山山上に御食津神(伊奢沙和氣神)を祀られた。氣比神宮の主祭神である。化氣神社に鹿の角の彫刻が多くある。本宮山への登山道に「旭川源泉」の湧水がある。



化氣神社



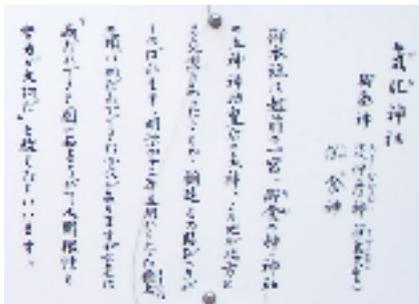
鹿の角・彫

#### 4. 豊原北島神社の境内摂社 氣比神社

『岡山県神社誌』に収録されている氣比神社は、豊原北島神社(瀬戸内市邑久町北島)の境内摂社のみである。祭神は応神天皇・神功皇后・比め大神・豊原北島神である。境内摂社・氣比神社の説明に「祭神 足仲彦神(たらしなかつひこ・仲哀天皇)・保食神。この地が北方とも交流があったことや、朝廷との結びつきがしのばれます。」とある。氣比神社の祭神名を保食神と品陀和氣命(応神天皇)の父、足仲彦神(仲哀天皇)としている。



豊原北島神社



氣比神社

#### 5 『備前吉備津彦神社縁起写』と

##### 『備前吉備津彦神社旧記断簡』

『備前吉備津彦神社縁起』延宝丁巳(延宝 5年・1677)朱印に、「山陽道 備之前州 一品宮者、人皇第七代 孝靈天皇 第三之皇子 五十狭芹彦命(いさせりびこ)也、又名 吉備津彦命、母謂細媛命。一品 吉備津彦大明神 併相殿神 吉備津武彦命、孝靈天皇三世之孫也」とある。『備前吉備津彦神社旧記断簡』に、「孝靈天皇三男三女

第一孝元天皇、第二越前一宮、第三備中一宮、長姫宮、第一備前一宮、第二尾張宮、第三讃岐一宮、備後一宮一門タリ」とある。第二越前一宮より氣比(けひ)神宮との関係が確認された。『備前吉備津彦神社縁起写』は、五十狭芹彦命と『日本書紀』による表記がされている。

#### 5.1 氣比神宮日本殿内陣の桃太郎像



戦災で焼失した日本殿内陣の柱に桃太郎の彫像があった。髪を美豆良(みずら)に結び、扇を手にひれを両肩から掛け、舞うような姿で桃から現れる。美豆良に注目したい。美豆良は古墳時代の男性埴輪に見られ、茨城県武者塚1号墳(7世紀後半)から左側のみ、ほぼ完全なミズラが出土している。



ミズラは大陸の北方文化とされている。この桃太郎像については氣比神や氣比社の成立にも関わる

推測説があるとされている。氣比神宮“桃太郎誕生地”説がある。「桃太郎像」は慶長19年(1614年)福井藩祖結城秀康が寄進した本殿内陣の柱に彫刻されており、氣比神宮の桃太郎が最古の桃太郎像である。『備前吉備津彦神社旧記断簡』の「第二越前一宮」との関係と推定している。

#### 5.2 氣比神宮・女桃太郎説

桃太郎像の衣装が平安時代の女房装束(しよぞく)だとする女桃太郎説がある。十二単(ひとえ)は皇室の正装であり、平安時代の女房装束をもとにしている。檜扇の手もとの袖のあたりを見ると3枚ほど重ね着をしている。十二単であると推定できる。髪飾りから女性であると推測できる。髪型は、上の方は髪を結っているような、そして下の方は髪を結っていないような感じである。これは奈

良時代の女性の髪型に近い。右手に檜扇（ひおうぎ）を持っている。ヒノキの板で扇子（せんす）を作ったものである。檜扇も平安時代の女性の正装条件である。

女桃太郎説のモデルは誰か、吉備国の住人であれば吉備津彦命の姉の名前、ヤマトトトヒモソヒメを連想する。倭迹迹日百襲媛命は岡山神社の主祭神で、讃岐国一宮・田村神社の主祭神でもある。倭迹迹日百襲媛命の氣比神宮滞在を記念に残す為の桃太郎像となる。倭迹迹日百襲媛命は大物主神（大神神社の祭神）の妻となる。箸墓古墳は、宮内庁によって第7代孝霊天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命の墓として管理されている。この古墳を卑弥呼の墓とする研究者も多い。

### 5.3 氣比神社伝承と桃太郎伝説

福井県には、氣比神宮の他に氣比神社が10社ある。氣比神社（福井県丹生郡越前町氣比庄）は氣比神宮の勧請社とされ、福井県内でも屈指の歴史を持つ古社である。現在の宮司は角鹿尚計氏である。敦賀の地名説話に登場するツナガアラヒトの子孫である。初代の角鹿国造から63代目、本家氣比神宮の島家より分家して13代目にあたる。

『鯖江精機通信 創刊春号No.1 特集 氣比庄』に、「角鹿家の先祖キビツヒコは、桃太郎伝説の桃太郎説もあり、氣比庄には特異な桃太郎伝説があったらしい。（氣比は「きび」と読むことができる。）」とある。

（角鹿尚計氏は、福井市立郷土歴史博物館副館長。2002年角鹿国造家を継承し宮司就任）

## 6 突厥国と敦賀

武智鉄二氏の「突厥国からの渡来人説」を紹介する。

①「テュルク族（突厥国）の王は可汗（カカン）、王妃は可賀敦（カガトン）と呼ばれる。可汗は加賀国（石川県）の語源をなすものではないだろうか。可賀敦の下二字をひっくり返すと、そのま

ま敦賀になってしまう。」とし、「テュルクの転化と考える他はない。そうでなくては、縄文後期の製鉄遺跡の説明がつかない。」

② 日本へ製鉄技術が渡来し、一番古い登り窯は石川県加賀市豊（ゆたか）町の瓢箪池二号炉（BC500～300）とされ、同一年代の鉄遺跡が福井県金津（かなつ）町細呂木（ほそろぎ）駅製鉄跡Ⅰ（BC550～370）である。年代測定法は炭素定着法である。「福井県・石川県に高度の製鉄文化を担ってテュルク人（突厥国からの渡来人）が定住したことは、ほぼ間違いない。」

③ 『旧唐書鉄鞞伝』に、「鉄鞞（てつろく）は匈奴から別れた種族である。突厥の勢力が強力となってから、鉄鞞の諸部族は分散し、その部衆は、次第に弱小となった。唐の武徳年間（618～626）の始めのころ、15の諸部族が漠北に散在していた。」とあり、その中に骨利幹（こつりかん）がある。「骨利幹が俱利伽羅峠（くりからとうげ）の語源と思う」。

俱利伽羅峠は、石川県河北郡津幡町と富山県小矢部市（おやべ）との県境にある峠である。宝達（ほうだつ）丘陵の南端にあり、標高260メートル。両県を結ぶ交通の要地として古くから開け、604年（推古天皇12年）の開道と伝えられている。

## 7 渡来人の日本流入経路

武智鉄二氏の「異民族の日本流入経路5説」を紹介する。

- ① 天山北路から南シベリアにかけて居住していた突厥系（古代トルコ系民俗）のうち、鉄鞞（てつろく）に属する骨利幹部族（あるいは複数の部族。鉄鞞は35部族よりなる。）が、日本海を横断して北陸方面へ、紀元前3～400年頃、冶金術（鉄器文化）を伝来する。
- ② 漢民族の中でも最も純粹に原中国民族系である華夏系（中原河北系）民族が、紀元前200年頃、水田稲作農耕技術を持って、渤海湾から日本本州西端部（現在

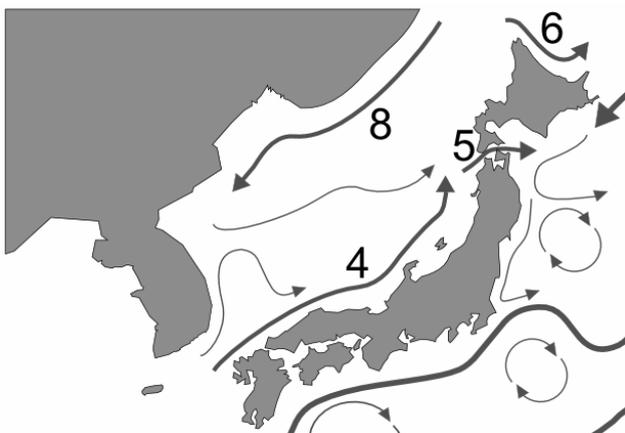
の山口県)へ渡来。

- ③ 中国の朝鮮植民地総督である帯方郡吏(太守)が、北九州の伊都付近に都督府を置き、卑弥呼の女王国と結んで倭の植民地化を計る。起源 0 年頃のことである。
- ④ 馬韓・弁韓・辰韓のいわゆる三韓のうち、弁辰系の部族が末盧(松浦)付近を占領して、弁辰の領土とする。また、韓の北隣の民族「濊」が、同じ頃日本へ進駐する。これが紀元 50 年ごろで、いわゆる天孫民族の日本征服がこれにあたる。
- ⑤ 宗谷海峡を渡って北シベリアの民族が侵入して日本の東北文化の基礎を築く。砂鉄生産の特殊技術である「たたら製法」を伝来したのは、この種族(タタール・韃靼系)と考える。

## 8 若狭(ワカサ)の語源とリマン海流

福井県若狭地方は古代日本の先進地域である。若狭(ワカサ)の語源に、朝鮮語のワカソ(往き来)説がある。

リマン海流 8 を利用し、古代から大陸の文化が朝鮮半島を経由し日本に伝来した。「リマン」とはロシア語で大河(アムール川)の河口(三角江)を意味する。サハリン(樺太)の南西から沿海州に沿うようにして朝鮮半島の北東(北緯 40 度)までの海流である。間宮海峡



付近からユーラシア大陸に沿って日本海を南下する海流(寒流)がある。日本海を北上する暖流の対馬海流が北上するにつれ冷やされ、

アムール川の淡水と混ざり、南下する。

## 9 まとめ

『続神道体系』収録の『先代旧事本紀大成経』の黄蕨国との記録を「突厥国からの渡来人が建国」と解説している。『先代旧事本紀大成経・巻第十八 神皇本紀上巻下』に、吉備津彦命は、「次彦五十狭彦命、亦名黄蕨邦彦命、黄蕨臣等遠祖也、」と記録されている。

- ① 平安時代中期に作られた辞書『和名類聚抄(わみょうるいじゅしょう)』の黄蕨国の読みは、備中(吉備乃美知乃奈加)、備後(吉備乃美知乃之利)は同一であるが、備前(岐比乃美知乃久知)のみが異なっている。氣比神宮の比の字使用に注目している。
- ② 末社擬領神社の祭神は武功狭日命(たけいさひのみこと)である。武功狭日命は吉備臣祖稚武彦命の孫である。稚武彦命で吉備国と直結する。
- ③ 氣比神宮旧日本殿内陣の桃太郎像に注目したい。女桃太郎説のモデルは誰か、吉備津彦命の姉のヤマトトヒモモノヒメを連想する。倭迹迹日百襲媛命は大物主神(大神神社の祭神)の妻である。宮内庁は箸墓古墳を倭迹迹日百襲姫命の墓として管理している。
- ④ 大吉備津彦命は伝説上の人物であるが、武功狭日命は擬大領職であり実在の人物である。
- ⑤ 「テュルク族(突厥国)の王は可汗(カカン)、王妃は可賀敦(カガトン)と呼ばれる。可汗は加賀国(石川県)の語源をなすものではないだろうか。可賀敦の下二字をひっくり返すと、そのまま敦賀になってしまう。」という武智鉄二氏説は正しいと考える。
- ⑥ 吉備津岡辛木神社(キビツオカカラキ・岡山市中区海吉)の祭神、吉備若武彦命が稚武彦命である。古くは吉備明現宮と呼ばれていた。



## 10 謝辞

平成 22 年 4 月 30 日に若狭哲六先生と片山伸栄氏に化氣神社を御案内いただいた。平成 22 年 6 月 16 日に野崎 豊先生に豊原北島神社の境内摂社 氣比神社を案内していただいた。敦賀訪問前に辻野清勝氏(『本州鞍部の町 敦賀の歴史』)に敦賀の調査方法について教示をえた。平成 22 年 10 月 21 日に擬領神社の調査の為、氣比神宮を訪問し、桑原宏明氏(権禰宜)に「擬領」について質問した。「そんな難しいことは質問しないで下さい。」との回答だった。平成 23 年 2 月 26 日に大井 透氏より「擬領神社わかりました。正確には擬大領。」とのメールを戴いた。擬大領と大領との関係も明確にすることができた。

私の出生地は石川県小松市大領中町である。「大領の意味は」という子供の時からの疑問が漸くとけた。備前西大寺のルーツとされる周防国観音霊場、二井寺山極楽寺(山口県玖珂郡周東町神幡)の 1766 年の「新寺山由来記」に、「当山ハ聖武天皇ノ御宇天平年中ニ当国玖珂ノ大領秦皆足朝臣ノ草創ナリ 天平 16 年(744 年)」とある。これも大領の記録である。

## 11 参考文献

- 『北陸道総鎮守 氣比神宮』  
<http://kehijingu.jp/>  
 『氣比神社七座』  
<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db/jinja/300101.html>  
 『甲斐国一宮 浅間神社』  
<http://asamajinja.jp/>  
 『日本の神々-神社と聖地 第八巻 北陸』1985 年 白水社  
 『改訂増補 日本神名辞典』平成 13 年 神社新

報

社

- 『吉備津神社』藤井駿 昭和 48 年日本文教出版  
 『日本国語大辞典 第二版②』2001 年 小学館  
 『日本国語大辞典 第二版⑧』2001 年 小学館  
 『日本国語大辞典 第二版④』2001 年 小学館  
 『国史大辞典 4』昭和 49 年 吉川弘文館  
 『古事類苑 官位部二』昭和 9 年 古事類苑刊

行

内外書籍(株)

- 『吉備津彦神社史料』文書篇 昭和 11 年 国幣小

社吉備津彦神社社務所

- 『福井県史 通史編 1 原始古代』平成 5 年 福井県

- 『敦賀の歴史』平成元年 敦賀市史編纂委員会  
 敦賀市役所

- 『氣比宮社記』昭和 15 年 官幣大社氣比神宮  
 『化氣神社』

- <http://websakigake.sakura.ne.jp/06-134.htm>  
 1

- 『日本古典文学体系 1 古事記祝詞』昭和 33 年 岩波書店

- 『日本古典文学体系 67 日本書紀上』昭和 42 年

岩波書店

- 『福井県の地名 日本歴史地名体系 18』1981 年 平凡社

- 『岡山県神社誌』岡山県神社庁

- 『古代出雲帝国の謎』武智鉄二 平成 2 年 祥伝

社

- 『先代旧事本紀大成経(一)(二)(三)(四)続神道体系 論説編』平成 11 年 小笠原春夫校注 神道体系編纂会

- 『平成二十年度特別展 氣比さんとつるが町衆 氣比神宮文書は語る』平成 20 年 敦賀市博物

館

- 『美作国の成立事情』狩野 久(奈良文化財研究所)

2013.8.11 岡山県立博物館講演

『日本で最も古い「桃太郎」が居ました。氣比  
神  
宮』

<http://www.lococom.jp/article/view/24519>

26

/

『大発見！ 氣比神宮・桃太郎』

<http://yoshi-bay.com/index.php?id=47>

『鯖江精機通信 創刊春号No.1 特集 氣比庄』

平成20年6月 鯖江精機広報委員会

鯖江精機株式会社 福井県丹生郡越前町氣比  
庄

22-8 <http://www.sabaeseiki.jp>

『桃太郎と邪馬台国』前田晴人 2004年 講談  
社

『氣比神宮の桃太郎は女だった』

<http://ameblo.jp/kodaitantei/entry-10279>

30

6964.html